



文部科学審議官 山中伸一



東京大教養学部長 長谷川寿一

第3部

大学の動き・ 国の役割

高等教育は、大学の入試制度や教育内容に影響を受ける。
また、国の教育政策を踏まえて、指導内容を変えていく必要もある。
グローバル化社会を前に、大学はどう動こうとしているのか。
また、国の教育政策の背景となる考え方はどのようなものなのか。
ここでは、東京大と文部科学省へのインタビューの内容を紹介する。

ボーダレス社会で求められる 国際的センスや論理力

東京大教養学部長 **長谷川寿一** Hasegawa Toshikazu

グローバル化の進展に伴い、大学教育も進化している。
東京大教養学部ではグローバル化する社会を見据え、2012年度に秋入学を一部スタートさせる。
教養学部長の長谷川寿一教授が、
これからの学生に求められる力や同大での実践について語る。

街角で見かける グローバル化した日常

社会のグローバル化は、経済だけにとどまらず、人やモノ、文化など、あらゆるものを巻き込んで激流のような勢いで進んでいます。国内においてもグローバル化を感じない日はありません。電車内や街角では日常的に外国語で話す姿を見かけますし、お隣の韓国から音楽を始めとした文化が流入したり、逆に日本のマンガが海外で人気を博したりしています。

今の高校生や大学生はインターネットを自在に使いこなし、ボーダレスな社会が当たり前という環境で育っていますから、おそらくそれほど抵抗なくグローバル化を受容できるはず。自分自身がグローバルなものにかかわりたいという思いも強いのではないのでしょうか。

こうした社会の変化に伴い、若者は国家や国境をあまり意識しなくなりつつあります。しかし、近代国家をつくり上げるためにはナショナリズムが必要であり、明治

以降の大学教育は国家に貢献できる人材の育成に努めてきました。そのために本学が果たしてきた使命も大きかったと思います。

語学力と論理的な表現力が グローバル社会での基礎

それではグローバル化を受けて、これからの大学教育はどの方向に進むべきなのか。グローバル化の波はいや応なしに押し寄せているわけですから、それに対応できる力を身に付けることは不可欠です。日本人としてのアイデンティティーをしっかり持った上で、世界の中でさまざまな文化を持つ人々としなやかに渡り合い、共生し、国際社会に自然に溶け込める人材を育てる必要があります。

そのためには、語学力と論理的な表現力が基礎となると考えています。自分とは異なる価値観を持つ人と向き合った時に、それを受け入れた上で、自分の考えを論理的に組み立て、自信を持って表現する。これを英語で出来るようになることが求められるのです。

しかし、最近の学生を見ていると、論理的な表現力が弱いと感じることがよくあります。背景には、学生の生活や気質の変化があるのでしょうか。おおらかで素直で優しいのですが、対立することを避け、真剣な議論をしたがらない。トラブルを起こしたくないという気持ちが強く、失敗を恐れてチャレンジもあまりしない。

本学でも、学習意欲の高い学生が一定の割合でいる一方で、受け身の姿勢の学生も増えていきます。大学側としては、授業で疑問を持ったら教員に食いついて質問するような学生を欲していますが、最近、そのあたりはすいぶんと淡泊になりました。

かつては、高校生の時分に5、10歳くらい年上の先輩と論じ合う機会がありました。今の若者の間では縦よりも横のつながりが優先されるようです。自分の近未来を想像させるような先輩との交流を通して、「自分もこうなりたい」と感じたり、薦められた本を読んだり、ディスカッションに負けて悔しがったり、そのような経験が



◎東京大大学院人文科学研究科心理学専攻修士課程修了。同大学院博士課程単位取得退学。文学博士。専門は人間行動進化学、行動生態学、進化心理学。

希薄になっている状況は、学生の論理力が低下していることと無関係とは思えません。

おそらく以前に比べて、高校時代の読書量も減っているでしょう。私たちの世代ではサルトルやカミュなど、「これくらいは読んでおかないと仲間内で話が出来ない」といった書物がありました。今の学生はインターネットで検索するなどの情報探索能力は以前よりもはるかに高いのですが、少し背伸びをして難しい本を読んで、

じっくりと考える機会は乏しいようです。

世界に対する「知的解像度」を高める

こうした学生にボーダレスな社会で通用する力を身に付けさせる教育が、大学の今後の大きな使命となります。従来の大学教育は、一つの専門分野を究めさせるのが基本でしたが、グローバル化が進み、社会の問題はより複合的に

なっています。そのため、自分の専門を持つと同時に、各専門分野の相互の関係をきちんと理解することが、現代の教養として求められているのです。

本学でも、そうした複眼的な思考方法を習得する教育へと転換しつつあります。ある問題に対して自分の専門分野からアプローチしても解決できない場合に、他にどのようなアプローチがあるのかを想像し、実行できるような人材を育てたいと考えています。

そうした思考方法を身に付けるには、自分の専門以外にも視野を広げると共に、世界に対する「知的解像度」を高める必要があると考えます。つまり、視野を積極的に広げ、なおかつ見えた部分を掘り下げ、深く追究していく姿勢が必要なのです。解像度の高まりを実感することで、知識に対する欲求も更に高まっていくのです。

12年度よりスタートさせる教養学部での秋入学

ここで、本学の教養学部におけ

るグローバル化を見据えた取り組みについて具体的に説明しましょう。

教養学部の国際日本研究と国際環境学の2コースでは、12年度から入学後の授業を全て英語で行う「学部英語コース特別選考」を実施します。本学としては初めての学部「秋入学」のコースで、主に外国人留学生や帰国生、インターナショナルスクール出身者などを対象としています。大学のグローバル化を進める一つの契機にしたと考えています。

教養学部後期課程の短期留学制度「AIKOM(*1)」は、世界中の約30か国の協定校との間で、1年間に渡り相互に学生を交換し、単位互換する制度です。海外に出て多様な価値観に触れたり、留学生と共に学んだりする体験は、学生の視野を広げるまたとない機会になるでしょう。

最近、学生が海外に出なくなってきたという話をよく聞きますが、本学で留学説明会などを行うと、参加者は非常に多くいます。おそらく、今の学生が海外への関心を

* 1 Abroad in Komaba の略

失っているわけではありません。ただ、昔は少々無理をしても飛び出していく学生が大勢いたものですが、今は十分に準備を整えて自信を持ってからでないと行動できなくなっているのが理由だと思います。大学には以前にも増して学生の背中を押す役割が求められており、AIKOMはその一環として始めた制度です。

語学力の養成にも力を注いでいます。特にアクティブ・ラーニングを重視しており、08年度には理科類の1・2年生を対象とした必修プログラム「AL ESS（*2）」をスタートしました。これは、英語のネイティブ教員による指導の下、主体的に実験や調査を行い、日本語を一切使わずにディスカッションをして、最終的に英語で論文を書き上げるというプログラムです。理系の学生にとっては欠かせない、科学者としての英語コミュニケーション能力の育成を図っています。こうした英語力を土台として、大学院ではスムーズに英語の論文を書いて発表できることを狙っています。

もちろん、文系の学生への実践的な英語力の育成も時代の要請としてあります。そこで、12年に「AL ESS」のプログラムを文系用にカスタマイズして試行する予定です。

世界のリーディングユニバーシティは例外なく、大勢の留学生を受け入れており、多様な価値観の交流を通して学生に国際的なセンスを身に付けさせています。本学全体でも、5年後をめどに「秋入学」の導入を検討しています。我々もより多くの留学生の受け入れと送り出しが重要と考えており、前向きな議論が続けています。

初等中等教育との連携で社会で活躍できる学生を育成

このように本学では、グローバル化に即した制度改革を進めていますが、同時に初等中等教育とのつながりも大切にしています。

日本の国力は、国民全体が基本的な学力の高さを維持している状況に支えられており、その点で初等中等教育が果たしている役割が



大きいことは間違いありません。高校の先生方には、これまでと同じように、生徒が基礎的な学力を十分に身に付けることを、是非お願いしたいと思っています。

同時に、大学と同様、高校も世界に開かれた場であるという意識を持つていただきたいと思っています。学びの意欲は、生徒が学ぶ意味や意義を実感した時に最も高まります。高校の先生方が現代社会の直面する問題に敏感な感性を持つていれば、例えば、ある学習が環境問題やグローバルな問題にリンクしていることを伝えるなど

して、生徒の「なぜ学ぶのか」という問いに対してリアリティーのある答えを提示できるように。生徒の意欲を高めるには、高大連携も効果的ですから、大学が協力できることがあれば、ぜひリクエストを寄せていただきたいと思っています。

今後も本学は、これまで通り日本の初等中等教育の良さを大切にする大学であり続け、日本の教育を受けてきた学生に勇気を与え、学生が世界に出ていくための背中を押す存在であり続けたいと考えています。

* 2 Active Learning of English for Science Students の略